

## T. Romein : Education and

## Responsibility を読んで

秋田稔

終戦後、我が国の教育は原理的にも制度的にも根本的な大転換を遂げた。それは、敗戦後の混乱の只中で、過去の国家主義的教育への反省と、平和と新生への希望に燃えて、自らの責任において選びとった新しい人間形成への道ではあったが、占領という特殊事情の下で、時代のうごきのはげしさに追われながら過去からの清算を急ぐあまりじつくり考える暇もなく発足したということもあって、その基調を、主として占領国たる米国の教育者たちの日本教育の改革に関する勧告意見の線に持たざるを得なかったことも、また己むを得なかった。が、それから十年を経過し、世情一般が落着きを取り戻

すにつれ、新教育理念の根本的検討の機運も生じ、それと共にその行き方の問題性も露呈しはじめたが、ここで我々の担っている問題を深く見究め、世界史的な視野に立って歴史的社会的諸条件の下での我々の真に相応しい歩みをもう一度確立し直さなければ、悔を後代に残すことになるであろう。我々の戦後の改革による新教育を理解しようとするとき、その根底にアメリカの教育思想のうちで進歩主義教育思想(Progressivism)といわれている考え方の影響が顕著であることを認めなければならない。プログレンツビズムはルソンの自然主義的教育思想に源を発した近代ヨーロッパ教育思想の系譜を引くが、デューイ等により確立されたプラグマティズムの哲学に基礎づけられて、アメリカ的な展開を遂げたものである。この教育観自身はそれ以前の伝統的な教育に対する反抗として起った米国での新しい教育運動の所産であり、教育史上大きな意義を有するものではあるが、それを我々の教育の新理念としてその儘取り入れることには問題がある。我々は、単に自己を確立して社会の変化に自らを適應させるというのではなく、強烈な責任感に燃えて真に自らをも

社会をも清め、正しくその変化を形成し方向づける力を自ら  
のうちに生み出すような人間形成の教育を確立することを念  
願としているが、激変する世界の中での日本の歴史的な状況  
と社会的な背景の下に、プログレッシビズムとその目指す人  
間像とが、その儘我々のこのような目標と希願とに叶ってい  
るかどうかは問題である。深い世界的洞察と実践への意欲  
を秘めた生ける教育理念は、真に未来への希望と人間への信  
頼とに生きる人格的生命との深い結合からのみ生れると、私  
は思っているが、人間形成におけるかかる根源的力が、何で  
あるかを、我々はもっと虚心に突きつめなければならぬと  
思う。我々にかかる根本問題に関連して、キリスト教が教育  
に対して発言すべき現代的な役割を考えているのであり、人  
間形成の教育とキリスト教の問題の究明を我々の課題として  
いるのである。このように、我々が日本の新教育の根底を問  
い、そこでの人間像を問題としているのとある程度の共通の  
態度をもって、米国での様々の教育思潮を、その人間把握に  
おいて根底的に問い、キリスト教的人間把握と、その上に展開  
される教育理念の再確立を目指すものの一つとして、我々は

T. Romeijn: *Education and Responsibility* を読んで

Tunis Romeijn の *Education and Responsibility*, Lexington, 1955 なる書を操り上げることが出来る。我々はこの著者についてはこの書以外で知るところは殆どないし、そこでの問題は純粹に米国人の教育の問題であり、従ってその問題の突込み方いかにも米国的だとみられる点もあるにはあるが、しかしそういう枠を越えて、現代世界の人間形成の問題への、そして我が日本の困難な問題の反省と解決への一つの有益な参考材料となり得るように私には思われる。

その題名の示している通り、著者は教育ということを、人間における責任観念(人格的応答性) *Responsibility* の発達との関連で把握している。人間は本来間柄的、関係的存在であり、人間の人間たることは、その人格的応答性にある。近代社会の最大の危機は、人間関係の分裂、人格的応答性の喪失にあるのであり、そこでは人間は人間でなくなりつつある。かくて二十世紀の教育の根本問題の一つとして、責任を果し得る人間 *responsible person* を形成するということがあげられるのである。この問題を突込んで考えるには、ある教育理念を、その拠って立つ人間把握にまで掘下げ、それ

が人間喪失の危機を救うという現代的課題に耐え得るや否やをためさなければならぬが、著者は今日の米国教育界における拮抗するいくつかの教育理念をその基く人間像によって比較考察しつつ、これらが時代の錯綜せる事態の中で責任ある人間を形成するという問題にどういう発言と役割をなし、どういう問題性に直面しているかを平明懇切に説いているのである。

内容は、第一、進歩主義教育 *Progressivism* (一) 進歩主義教育の概要、(二) プラグマティズムの人間観、(三) 人格的応答性涵養の問題の進歩主義的解答、第二、古典的人文主義 *Classical Humanism* (四) 古典的人文主義の概要、(五) ギリシヤの人間観、(六) 人格的応答性涵養の問題への古典的解答、第三、教育再建派の教育観 *Educational Reconstructionism* (七) 教育再建派教育観の概要、(八) 社会的人間観、(九) 人格的応答性涵養問題への急進的解答、第四、教育、コミュニティ及びキリスト教信仰、(十) 教育、国家、キリスト教信仰、(十一) 宗教改革の人間観とトミズムの人間観、(十二) 教育と現代プロテスタント・キリスト教

信仰、(十三) 人格的応答性涵養の問題への神学的解答、(十四) 教育、社会、キリスト教信仰、である。

米国において旧思想に対抗して十九世紀末頃から新しい教育運動がおこっていたが、その結果が「進歩主義教育」といわれるものであり、その哲学的基礎をデューイなどのプラグマティズムに持っている。プラグマティズムに於ては真理は本来不変絶対的なものではなく、可変相対的なものであり(相対主義 *relativism*)、それによって人間の経験をおしはかるような固定的規範ではなく、経験の結果に於て持続的に発見される何かである(経験主義 *experimentalism*)。教会主義をはじめすべての宗教的、世俗的權威に反抗するプラグマティズムは、その故に *superprotestant* といわれるが、従って人間を何かの權威、目的の下に把握することを峻拒し、人間自体常に生き成長するものとしてこれを動的にとらえ、教育はこの成長の援助であるとする。ここから児童の興味を刺激しその成長を助長する児童中心の自由主義的教育理念が生れる。又人間は本来自らの力で環境世界に面しその問題を自分自身の能動的知識で解決するのであるが、青少年

のこの動く世界への適応、働きかけを助け、彼らが最も望ましいことを自分で決めることが出来るよう、実物と実行による教育指導 *Guidance* が行われることが強調される。プラグマティズムの人間観は明かに自然主義的であり、超自然的なもの助けなしに生活と社会を完全に秩序づけ得る *human nature* への深い信頼と樂觀主義がそこにある。又、普遍的存在を認めず、一人一人の自由な成長を信ずる点で個人主義的である。

かかる人間理解に於て、道德的な応答性の因となるものは人間自然の内なる同感感情 *sympathy* と愛である。絶対的道德規範を認めず、しかも人間を自然主義的に把握する立場では、人と人との間の問題、即ち道德的応答の問題は本質的には、同感感情、愛による「好み」の問題となる。効果、有用をめざす活動は人間に満足をもたらすが、その最も昇華成長したものである。拍車となるのである。実際には知的活動が道德的活動なのである。未経験、無知が道德的責任觀念欠除のものであり、豊かなる経験と知識とがフェロシップのもとである。かくて

人格的応答の問題はここでは人間の問題というよりも環境とのかかわり方の問題となる。

古典的人文主義は、プラグマティストたちが教育活動それ自身が目的であると主張して、教育の明確な目的を不要とする考え方に抗して、不動の真理は存在しないのかと問うところから出発する。プラグマティズムの如き一種の自然主義的決定論は個人の責任觀念に場所を与えない。人は真理の永遠不変なることをもう一度学び、永遠の法の下、理性の支配による責任ある生活をしなければならない。プラトン、アリストテレスさらにはストア派にその範をとる古典的人文主義者の人間観は精神、肉体（理性・情慾）二元論である。理性は人間の内なる神的ひらめきともいうべきもので、全体を見通し、そのなすところが善であるか、人間の幸福となるかどうかを計量しながら、慾望を統御してゆくものであり、それは永遠の神的真理につながる。教育とは理性に目覚めさせ永遠不動の真理価値を把握することへの訓練である。人間はかかる理性の所有の故にあくまで尊い。かくて自他における理性の支配をはかることこそ自らをも他人をも尊重する所以であ

り、そこに責任ある人間が形成されるのである。

**Educational Reconstructionism** は、米國社会の一九三〇年代にみられた大きな変化、新しいコレクティブイズムの時代に応じて、進歩主義教育の改変として出現した教育運動である。新しい世界は新しい人間を求めているが、新教育はすぐれて社会的でなければならぬ。社会の変革に応じ、また変革をなすために個人を個人主義的人間より社会的な人間に変えなければならない。デュイーとマルクスの綜合ともみられる社会民主主義の思想がこの教育理念の背後にあると見てよい。責任を果す人間形成の問題においても、ここでは社会的責任が個人的責任におきかわっている。二十世紀の問題は大衆運動と大衆関係に中心がある。かくて団体精神 **Group mind** を発見し、社会的自己を実現することが急務であり、グループのための自由をうちたてるための集団的努力がなされねばならない。そしてそのための教育訓練は進歩主義教育の如く興味にうったえるのでなく、古典人文主義者の教育思想の如く權威ある教育者によってでなく、グループ・コントロールそれ自身によりなされる。問題へのグループによる接

近により、各人はグループの意見の形成に与かりつつ、これを負うことを学ぶのである。グループの責任觀念は共に、責任、責任觀念であり、社会的責任の觀念はここで涵養される。真に教育するのは社会である。かくてグループ活動を通しての学習も、学校から社会へと広がってゆくのである。

さて、初期の米國の教育はうたがいもなくプロテスタント基督教にその基礎を置いていたが、世の世俗化的傾向はとうとうとして米國教育界をも風靡した。が、キリスト教の人間把握は責任ある人間形成の問題に関し重大な発言をなし得るのであり、教育のキリスト教的基礎は明瞭に問われなければならない。

キリスト教は、人間を創造主たる神への人格的關係においてあるとする。神は「われわれのかたちに *in our image*、われわれにかたどつて *after our likeness* 人を造る、…」トミズムではこの *image* をギリシヤ的把握の如くに人間の「理性」と解し、*likeness* を創造主との人格關係に入り得るために神より与えられた超自然的なもの *Original super nature* と見る。そして人間の墮落は *image* にかかわるの

ではなく *likeness* に関するのであり、その回復は教会を通しての神の仕事なのである。が一方、プロテスタントイズムではこの *image* と *likeness* を別とはせず、人間は全身

全霊をもって創造主と他の人々に応える全一の存在であるとする。現代のプロテスタント神学者は明瞭に人間が神との関係を有すること *relationship* に人間性の意義を認めている。人間は主体であり、人格 *person* である。それを知る唯一の道は人格的關係によってであり、人の人格は永遠なる人格（神）に深く根ざす。人格の起源は神的ミステリーであり、人間の創造は神の愛の行為であるといひ得るのみである。真の人格的關係は愛であり、愛と信頼は人格の最高の表現なのである。そして人間の墮落は全人的なもので理性もまた別ではない。このするどい罪責の自覚からなされる良心的な行為をする人間像に、プロテスタント人間觀の特色がある。人間の神との、又人との全き正しい關係は責任を果す、即ち人格的にうけたえる關係であり、悪しき關係は人格的に応答しない關係であり、これが罪であり悪である。この人間の罪惡の問題に関してキリスト教はその他の人間觀と決定

T. Romein: *Education and Responsibility* を読んで

的に別れる。そしてこの点で責任ある人間の教育に対し深く關係し、強力な発言をするのである。

人格的自由と人格的責任觀念は、歴史的に見て明かに生けるキリスト教信仰に随伴していた。人格的応答性の問題はキリスト教的プロテスタント的人間把握の下において最も本質的な問題となってくる。そして聖書はこの人格的応答性が信であり愛であるといっているのである。自由なる社会の眞の基礎は愛により示される人間の内なる信仰である。人間は不完全である。しかし不完全な人間の不完全な愛にて表わされる不完全な信仰も、よき地の塩として人間社会に強い影響を与えるであろう。この著者は教育のキリスト教的基礎を問題にするに当り、ブルンナー *Emil Brunner* とペスタロッチ *Johann Pestalozzi* に特に負っているように思われる。ペスタロッチは人間教育を説くにあたり家庭教育の意義を特に指摘した。家庭こそ愛と信頼を養うに相応しい。教育の最高目的は母子の關係にはじまり、創造主と人間の關係に終る愛と信頼の強調である。かくて眞の教育の基礎としての愛が、彼の教育哲学にて強調されているのであり、その点から家庭

教育を重視し、最良の社会教育は家庭教育の直接の拡張であるとするのである。

要するに、神との正しい人格的關係が、他人への責任ある關係の眞の基礎であることを著者は力説する。教育と權威の問題、教育をめぐっての教会と国家の問題等にも彼はその見解を述べ、米国の現実の問題への解決の鍵を与えているが、今ここではそれを述べる余白がない。

この書を読んで感ずることの一つは、著者は様々の教育思想をとりあげてその責任ある人間形成への役割を見究めた末、当然のことのように聖書の人間把握とそれより展開される教育理念に帰って行っているということである。我々は此処に米国社会に於ける根強いキリスト教信仰の位置を思わざるを得ない。我々にはそういう伝統がない。従って問題の局面とその展開は米国とはことなつたけわしい相を呈し困難を示す。我々はそれを我々の問題としてつきとめ、解決への糸口を見出して行かなければならない。

## 第二号目次

### 研究論文

民主主義の根底にあるもの……………小島軍造  
寛容について……………関屋光彦

—キリスト教教育の在り方の基礎にかかわる  
問題として—

旧約聖書における「義」……………秋田 稔

—教育とキリスト教の問題に関連して—

自叙伝の研究及び自叙伝に依る研究……………岡部弥太郎

日本の教科書における国際理解の教育について……………高木とり

大学教育と視聴覚教育活動……………西本二十二

An Audio-Visual Center in a College of

Liberal Arts. ……………Roy Wenger

### 所感

「国際理解と国際協力の為の教育」について

……………日高第四郎

### 書評

木下一雄著「教育哲学」……………讚岐和家

### 所報